

偽装結婚なのに

幼馴染みの冷徹副社長に孕まされそうです

## プロローグ

「……寝るぞ」

湯上がりにはリビングで涼んでいたところ、一輝が陽葵の手を取り、寝室へ連れていかうとする。予期していたとはいえ、彼女の心臓は大きく跳ねた。

先ほどから落ち着きなくソファで待っていた陽葵は、一輝の顔をまじまじと見上げる。

(本気なの……?)

キリリと上がった眉の下の一輝の瞳が熱を帯びて、じっと自分を見つめている。精神だがどちらかというは無愛想な彼のそんな表情を見ることがなかったので、鼓動がさらに速まった。

「契約したろう?」

嫌がっているかとも思ったのか、念押しするように彼は言う、気まづげに目を伏せる。

意外と長いまつ毛が彼の整った顔に影を落とした。

たしかに陽葵は一輝とある契約を交わして、今日入籍したところだ。

その内容に納得したから、今、ここにいるのだ。

でも――

陽葵は掴まれた手を引っ込めて、表情の読めない彼に問いかけた。

「一輝、本当に私でいいの？ 後悔しない？」

彼にはたぶん想う人がいる。その人と結ばれるのが難しいから、偽装するため陽葵に契約結婚を持ちかけてきたのだと理解していた。

（ほかに好きな人がいるのに、私を抱けるの？）

そう考えて、陽葵の胸がちくりと痛んだ。

しかし、一輝は視線を上げるときっぱり答えた。

「後悔はない。それに早く子どもがほしい。……嫌か？」

最後の言葉はトーンダウンして、陽葵を窺うようにためらいがちに付け加えられる。

（そうだ、跡継ぎ……）

誰もが知る家電メーカー、タカトーの社長の一人息子である一輝には、跡取りを作る義務がある。本当の想い人とは子どもは望めないから、陽葵に産んでほしいと言っているのだろう。

陽葵はもちろん嫌だとは思っていない。

むしろ、ずっと好きだった一輝との子どもを想像するとうれしくなる。彼との将来がどうであろうと、子どもを愛せる自信はあった。

それにそもそも陽葵は契約条件を承知したのだ。嫌とかいいとか関係ない。

だから、質問には答えずに意志だけ告げた。

「私も子どもがほしいわ」

それを聞いて、一輝は表情を和らげたように見えた。そして、ふたたび陽葵の手を取る。今度は陽葵もためらうことなく素直に彼についていった。

でも、緊張して足もとがふわふわする。

寝室に入ると、真っ先にキングサイズのベッドが目に入り、ドキッとした。

白い壁に一面だけウォールナット材を使った寝室は、間接照明の淡い光に照らされ、落ち着いた雰囲気だ。

その広いベッドの端に陽葵を座らせ、一輝が横に腰かける。

陽葵に向き合った一輝はその髪を掬い上げ、指を通すようにしてなでた。

ゆるいウェーブを描いた髪は胸まで届く長さで、彼の指からサラリと流れ落ちる。

一輝はじつと陽葵を見つめながら何度かそのしぐさを繰り返したあと、そのまま後頭部を掴んで引き寄せ、唇を合わせた。

それは触れるか触れないかという軽いもので、一度距離を取った一輝は切れ長の目もとを赤らめ、ふいに照れた顔をした。

その表情に陽葵はグッと心を掴まれ、しみじみ思う。

（やっぱり好きだなあ）

一度は忘れたと思っていたのに、再会してみたらやっぱり好きで、そばにいたらもっと好きになってしまった。少しもあきらめきれていなかった。

でも、この感情は契約結婚には必要のないものだ。

気持ちを感じられないようにそっと目を伏せると、一輝がまたキスしてきた。今度は長く唇を押し当てる。

下唇を軽く噛まれるとジンとした快感が生まれて、陽葵は驚いた。

(キスって気持ちいいのね)

偽りの結婚だから、こんな甘い雰囲気でも口づけられるとは思っていなかった。

好きな人とのキスを味わうことになるとは考えてもみなかったのだ。

陽葵が感慨に耽<sup>ひた</sup>っている間にもキスは深まっ<sup>ま</sup>ていき、口を開くと催促するように唇をべろりと舐められた。

驚いて唇を開くとすかさず舌が入ってくる。

自分の体温より熱い舌が口の中を隅々まで確認するように動き回る。

「っ、はあ……」

いつの間にか息を止めていた陽葵は苦しくなって、唇を離れた。

絡み合っていた舌がチュクツと音を立てて解かれ、その淫靡<sup>いんぴ</sup>な様に頬を染める。

濡れた口の周りを手の甲で拭った一輝は荒々しい瞳を彼女に向けた。

キスに翻弄<sup>ほんじやう</sup>されて頬を上気させ、ぼんやりしている陽葵を見て、彼の視線は一段と熱量を上げた気がした。

肩を押され、ストンとベッドに倒れ込む。

その上に覆いかぶさった一輝は、陽葵の身体をなでながら、唇を耳から首筋に落としていった。

くすぐったくてゾワゾワして、勝手に身体がくねる。

「あ、ん……」

胸をやんわりと揉まれて尖ってきた頂点を爪でカリカリと引っかかされると、初めての官能を覚えて喘<sup>あえ</sup>いでしまった。

そんな声は恥ずかしいと思わず口を塞いだら、「だめだ……」とつぶやいた彼がそっと手を外した。声を聞かせるといふことらしい。

ますます恥ずかしくなってしまう、顔が熱い。

(こんな丁寧になくていいのに……)

照れ隠しのように頭の中で文句を言う。

ただ契約を履行するだけなのだから、雰囲気をよくする必要はない。

陽葵は夜の営みについて、たいした知識を持っていないが、一輝が盛り上げようとしてくれているのだと感じた。

それとも、彼自身のテンションを上げるためだろうか。そう考え直して切なくなった。

好きでもない相手を抱くのだから、気分を高めないし続けられないのかもしれない。

愛撫しながら、一輝は陽葵のパジャマのボタンを一つ一つ外していく。

徐々に現れる肌に唇を落としながら。

彼に触れた場所がぼっと熱を持ち、陽葵の身体がほてった。

ボタンをすべて外して胸をさらすと、一輝はいったん身を引いて、彼女を眺めた。

灯りを消し忘れていたので、彼の瞳にはつきりと自分の姿が映っているのが見えて、陽葵は赤面する。

かといって、今さら隠すのも気まずくて、赤い頬のままささやいた。

「……電気、消して？」

普段はどちらかというと勝ち気な自分が、ねだるような声を出してしまつて恥ずかしい。

一輝がくつと喉奥を鳴らした。

彼の手が髪から肩をなでおろし、それとともに熱っぽい視線が自らの肢体の上をじっくりと動いていくのを感じて、ますます身体が熱くなつていく。

「……そのお願いは聞けないな」

かすれた色気のある声で一輝がつぶやく。

「っ、なんで？」

「見たいから」

断られるとは思ひもしなかった陽葵が抗議の声をあげると、一輝はニヤリと笑つて言った。

その直球の答えに陽葵はどう返していいかわからず、口ごもる。

(どうして……?)

戸惑つていただけなのに了承を得られたと思つたのか、一輝は身をかがめ、胸のふくらみに唇を這わし始めた。

「……っ、あ……」

乳輪を辿るように舐め、芯を持った頂点を口に含む。

熱く湿った舌がそこを弄ぶ。

一輝が自分の胸に吸いついている様を見て、信じられない思いと羞恥心で、身悶もたえた。

胸を揉みながら交互に乳首にしゃぶりつかれて、じんじんとした疼うずきが身体の奥に広がる。

口と指でたっぷり胸をかわいがったあと、一輝は陽葵のお腹をさすつて、その下へ手を伸ばしてきた。

パジャマのズボンの中に手が入ってきて、ショーツの上からなでられる。

疼いているのはその奥なのにと、陽葵はじれつたさを覚えて身をよじつた。

彼の手はふとももに移動して、なで下ろしながら、ズボンを脱がしていく。

硬く大きな手が大切なものに触れるようにそつと肌を滑つていくから、陽葵は照れくささと官能でじつとしていられない気分になる。

内ももを通つて、一輝の指が脚の間に差しかかった。

くちゅっ。

すでにじつとりと濡れていたショーツが淫らな音を立て、ますます頬が熱くなる。

「濡れてる」

「だつて……!」

くすつと笑つた一輝はやけに甘い声で甘いまなざしだった。

(一輝ってこんな顔もできるんだ……)

硬派な彼が色気のある表情をするなんて想像したこともなかった。

(偽装結婚なのに、こんなに甘くされると勘違いしちゃう。やめてほしい)

抗議をしようとした陽葵は口を開くが、割れ目に沿って指を動かした一輝が敏感な尖りを見つけてくるりとなでたので、嬌声しか出てこなかった。

「あんっ、そこ、やつ、ああ……」

味わったことのない快感が身体の底からつま先まで走って身体中をしびれさせる。

愛撫しながら陽葵の反応を楽しげに眺めていた一輝だが、身をよじるたびに揺れる胸の先のかわいらしい果実に目を留め、思わずというような口に含んだ。

「ああっ」

性感帯を二箇所も攻められて、快感が倍増どころではなくなり、陽葵は甲高い声をあげた。

身体がびっくりするくらい熱くなり、背が反って息が浅くなる。

溜まってきた快感が膨れ上がり、爆発する寸前、一輝は手を止め、口も離してしまった。

「っ、はあ……え……?」

拍子抜けした陽葵は彼を見上げる。

普段はクールな一輝が余裕をなくした表情を浮かべていた。彼はふうと深く息を吐いてから、びしょびしょに濡れていたショーツに手をかける。

ゆっくり脱がされる様子を見ているのがいたたまれなくて、陽葵は目を逸らしシートを掴んだ。生まれたままの姿になった陽葵に熱い視線を向けながら、一輝は膝立ちになり自らも服を脱いで

いく。

剣道で鍛えられた身体は割れた腹筋が美しく、見惚れていると、へそにつくほどに立ち上がった屹立<sup>きりつ</sup>が現れて、思わず唾を呑んだ。

(大きいし、太い。あれが入るの……?)

恐れと期待に身体が震える。

陽葵の視線からそれを隠すように、一輝はまた身をかがめた。

改めて彼女の髪の毛から胸、腰をねつとりなでると、脚の間に手を戻す。しかし、今度は尖りを通り過ぎ、蜜口を手で覆い、中指を差し込んできた。

「んっ……」

痛くはなかったが、初めて他人のものを身のうちに受け入れて、ビクツと反応してしまう。

「痛いかな?」

「ううん、大丈夫……」

心配そうに手を止めて聞いてきた一輝に平気な顔を作ってみせるが、そのやり取りも恥ずかしくて、早く終わってほしいと思う。

ほっとした顔をして一輝は指を動かし始めた。

狭い中をほぐすように。

愛芽をこねられたときのような鋭い快感はないが、じんわりとした気持ちよさに身をくねらせる。(気持ちいい……もっ……)

でも、またなにか足りない、決定的ななにかがほしいともどかしい思いに襲われる。

「あっ……ん……一輝、もう……」

ねだるように言うと、彼は大袈裟おおげさなほどに肩を跳ねさせた。

ゴクリと喉を動かして、陽葵を見つめる。

その意思を確かめるように。

自分を切望するかのようなまなざしに陽葵は戸惑った。

偽装結婚のはずなのに、どうして——と。

## 第一章 十年ぶりの幼なじみ

「西方にしがた、ちよつといいか？」

「はい。なんでしよう？」

そろそろ帰ろうと考えていたときに上司から呼ばれ、嫌な予感とともに陽葵は立ち上がった。

「これ明日の朝までに直せるか？」

「えっ、これって昨日最終入稿したものですよね……？」

上司がパソコン画面を指し示し、それを覗いた陽葵は少しツリ気味の目を瞬いて声をあげた。

そこには昨夜仕上げたばかりのデザインに、写真の差し替えやレイアウト変更の指示が書き込まれたものが映っていたのだ。

「クライアントがデザインの修正をしてほしいってさ」

「またですか!? その件は明日の朝では間に合いません。今日中に印刷所に差し替え原稿を入れな  
いと。セタマートさん、前回もでしたよね？」

（あんなに最終だって確認したのに。しかも、私を通り越して課長に言うなんて……）

心の中でぶつぶつ文句を言うものの、口には出せない。  
上司も同意して肩をすくめる。

「そうなんだよな。断りたいが、一応大事なお得意様だしなあ」

セタマートからは定期的にスーパールのチラシデザインを発注されている。陽葵の会社の安定した収入源となっており、失うことのできない大事な取引先だ。条件はよくないし、こうして修正が入りまくるので面倒ではあるが。

そのうえ担当者の世田はこんなふうには都合が悪いときだけ上司に直接連絡するので、それも止めてほしいと思う。たぶん陽葵が断りにくくするためだろう。

にやけた世田の顔を思い浮かべて、ついしかめ面になってしまった。

困ったように眉を下げた上司に陽葵はあきらめの境地で返す。

「……注文は細かいですけど、仕事はいつぱいくれますもんね。仕方ないですね。あ、でも、相手方はどなたが確認するんです？ 世田さんが終わるまで残ってくださいとか？」

「それが、『信用してるから任せた』って」

「いい加減すぎると思います。ぜったい居残るのが嫌でそう言ってるだけですよね？」

「まあ、そうだな。でも、見せてから、もう一度修正つてなるよりましじゃないか？」

「そうですね……」

毎度のことながら、責任感のなさに陽葵はあきれた。

（せっかく今日は早く帰れると思ったのに）

残業が決まりがっかりしたが、陽葵の性格上、冷たく断ることもできない。

（世田さんにもしつかり釘を刺せていたら、こんなことにならなかったのかなあ）

気が強いわりに、強くは出られない自分を情けなく思う。

せめてさっさと終わらせようと陽葵は気持ちを切り替えた。

西方陽葵はデザイナーだ。ここクロスデザイン事務所でパンフレットやパッケージなどのデザインに携わり五年経つ。

仕事は好きだが量が多すぎる。そのうえ、しばしばこういうクライアントの理不尽な要求に振り回されるから、頻繁に終電での帰宅になるほどだ。

それでも、昔からあこがれていたデザイナーになれたのは幸運だと思う。

陽葵は幼いころから絵が好きで暇さえあればイラストを描いていた。奨学金をもらって大学に行つてからは、デザインの勉強に必死で取り組んだものだ。バイト先もデザイン事務所を選び、雑務をしながら実務を教えてもらつて、ようやく今の会社に就職が決まったときには涙が出るほどうれしかった。

もつと腕を磨いて、人の記憶に残るようなデザインをしたいという野望を持っている。

「よし、やるか！」

気を取り直して、さっそく修正しようとデスクに戻ったとき、ピコンと電子音がして、スマートフォンにメッセージが入ったのが見えた。祖母からだった。

『急で悪いんだけど、明日うちに来られない？ ちよつと相談があつて』

七十四歳になつてもかくしやくとして駄菓子屋を営んでいる祖母にしては、めずらしい。

(おばあちゃんから相談があるなんて初めてかも。どうしたんだろう?)  
なにかよほどの問題でも起きたのかと心配になる。

陽葵は小学生のときに交通事故で両親を亡くし、母方の祖母に育てられた。父方の親族はすでに亡くなって、いなかったのだ。お金はなかったけど、愛情たっぷり育ててくれた祖母には感謝している。今、会社の近くの賃貸アパートで一人暮らしをできているのも、祖母のおかげだ。

その祖母になにかあったらと思うと血の気が引く。

思わず、胸もとのブローチに触れて、気持ちを落ち着けた。

アクアマリンで花を象ったかわいらしいブローチは昔好きだった人からもらったものの一つだ。つるりとした表面をなでると心が癒されるので、お守りがわりになっている。

気を取り直した陽葵はメッセージを打ち込んだ。

『昼には行けるよ』

明日は土曜日だから、降って湧いてきたこの仕事を今日終わらせれば休日出勤はない。

『よかった。じゃあ、待ってます』

祖母は待ち構えていたのか、即座に返信が来た。

不安に思いながらも、今はまず目の前の仕事を片づけなさいといけない。

陽葵はパソコンに集中してデザインの修正を始めた。

それなのに、今度は電話が鳴り、作業を中断させられる。

「お電話ありがとうございます。クロスデザイン事務所の西方です」

『あつ、西方さん? セタマートの世田です。ちょうどよかった。今、やってもらってるチラシで、一つ差し替えてもらいたい写真があるんです』

そう言われた陽葵はちらりと時計を見て、溜め息をついた。

時刻はもう六時を過ぎている。修正を依頼するには遅すぎる時間だ。

「世田さん、これ以上の修正は本当に間に合わなくなるので困ります」

『そこをなんとか。お詫びに今度食事でも奢りますから』

「いいえ、それには及びません。至急、どの写真を差し替えるのかメールをください」

陽葵は淡々と事務的に言った。

世田はことあるごとにプライベートに入り込むような誘いをしてくるので、迷惑しているのだ。本当は度重なる修正に文句の一つも言いたいところだが、大事な取引先の機嫌を損ねることはできないし、そもそも彼との話を長引かせたくない。結局、それには触れなかった。

『相変わらず、つれないですね。でも、これからはそうも言っていられないかもしれませんよ?』

「はい?」

『なんでもないですよ。じゃあ、メール送ります』

謎なことを言われて聞き返したものの、世田は言いたいことだけ言って、プツリと電話を切ってしまう。

(もうっ、勝手なんだから!)

陽葵はムカムカしながらも届いたメールを確認して、作業を進めた。

新たに届いた写真は背景をトリミングしないとイケないもので、地味に面倒くさい。それでも九時前には終わり、上司に確認してもらってから、印刷所にデータを送る。

「はあー、疲れた」

「お疲れさま」

陽葵が伸びをしていると、上司が慰労してくれた。

「いえいえ、お付き合いいただいて、ありがとうございました」

「俺が受けた話だからな。それにやらないといけない仕事があったから、それが片づいて、すっきりしたよ」

「それならいいのですが」

陽葵はパソコンの電源を落とし、帰る準備をした。

カバンを持って立ち上がる。

「お先です」

「ああ、よい週末を」

挨拶をして会社を出ると、祖母の相談ことを思い出して、陽葵は顔を曇らせた。

（気になるから、明日早めに行こう）

そう考えながら帰途に就いた。

「あつ……」

久しぶりの実家に帰ると、玄関先で長身の男性と行き合った。

キリリと上がった眉が印象的で整った顔つきの彼は幼なじみの高遠たかと一輝だ。

一輝は隣の豪邸に住む大手家電メーカー、タカトの御曹司で、今は副社長をしていると聞く。

幼なじみといっても、高校卒業以来会っていなくて、陽葵にとつて遠い存在になっていた。

それでも小さいころはべったりひっついていたし、両親が亡くなったときも誰よりもそばにいてくれた。当時はずいぶんと心を慰められたものだ。

陽葵は思わず、ガーネットのブローチを握りしめる。

それはパワーがほしいときにつけるブローチで、祖母の連絡に不安になったので、今日はこれを選んだのだ。

これは目の前の一輝からもらったもので、陽葵が持っているブローチのほとんどは彼からのプレゼントだった。一輝はいちいち覚えていないだろうが。

高校三年生まで、一輝とは仲がいいと思っていた。毎朝一緒に彼の家の車で通学するほどに。

無愛想だが心根は優しい一輝のことが、陽葵は昔から好きだった。

自分の気持ちを悟ったのは中学のときだ。彼が告白されているのを見て、猛烈な嫉妬を覚え、幼なじみとしてではなく異性として一輝に好意を持っているのに気づいた。

そのときあつさりと告白を断った彼を見て、陽葵はほっとした。でも今の関係を壊すのが怖くて、気持ちを隠すことにした。

文武両道の一輝はかっこよくてモテる。それなのに、誰ともつき合わないどころか、陽葵以外

の女の子とはめったにしゃべらなくて、もしかしたら自分たちは両思いかもと期待する気持ちもあった。

そんなあるとき、陽葵は学校の昼休みに一輝と友達の会話を聞いてしまったのだ。

「高遠ってさ、西方といつも一緒に通ってるよな。つき合ってるのか？」

「違う。あいつの家、生活が大変そうだから少しでも助けになればと送ってやってるだけだ」

一輝は二人の関係をきっぱり否定していた。

シヨックだった。みじめだった。

まさか送迎が貧乏な自分への同情から行われていたとは知らなかったのだ。

一輝も自分と同じ気持ちかもしれないと思っていただけに、衝撃が大きすぎて、そのあと放課後までなにをしていたのか覚えていない。

その日は彼を待たず、一人で電車に乗った。『これからは電車で行くことにしたから。今までありがとう』とメッセージを送って、スマホの電源を切った。

一輝から理由を聞かれても、冷静に対応できる気がしなかったからだ。

帰宅して自宅に入るなり、陽葵はカバンをぼとりと落として、わっと泣き出した。

帰ってくるまで、必死に涙をこらえていた。

膝から崩れ落ちて、号泣する。

(ただの同情だったなんて……。一輝が昔から私に優しくかったのはそれが理由だったの……。?)  
考えたら、彼はしょっちゅう陽葵にプレゼントをくれた。

お菓子が一番多かったが、文房具やブローチまで、とても気軽に渡してくるのだ。

特に、陽葵がある年の誕生日プレゼントにもらった花形のブローチを喜んでから、クリスマスやホワイトデーなど、ことあるごとに贈られた。おかげで、引き出しにちよつとしたブローチコレクションができたほどだ。それを陽葵は宝物にしていた。

(ぜんぶ、うちが貧乏だからかわいそうに思って、くれてたのかな)

陽葵は泣きながら、引き出しの中からブローチを入れている箱を取り出す。

きらりと光る美しいブローチたちも、急に色褪せて見えた。

好きな人がくれたプレゼントだと無邪気に喜んでいた自分が恥ずかしかった。

「こんなもの……！」

ブローチを掴むと、じやらりと音がした。そのまま床に投げ捨てようとしたが、それもできなくて、結局、抱きかかえるようにしてうずくまった。

泣いて泣いて、夕食も食べずに祖母に心配されながら、泣き続けた。

疲れ果てて寝てしまうまで――

そして、彼から離れる決意をする。

(一輝は悪くない。ただ優しいだけ。でも、もう、そばにいるのはつらすぎる……)

翌日は目がパンパンに腫れていたのもあって、学校を休んだ。

切ったままだったスマホの電源を入れたら、一輝から何件も連絡が来ていた。

『ごめん。体調が悪いから今日は休むね』

メッセージを送った瞬間、すぐに既読がつき、返信がくる。

『大丈夫か？ 体調悪いのに何度も連絡して悪かった』

『うん。こちらこそ返事してなくてごめんね。でも、もう送迎はいいから』

そう返すと、すぐ既読はついたものの、しばらく間が空いてから返信が来た。

『それは体調がよくなってから話そう』

話すことなんてないのにも思いながら、陽葵は『りようかい』とスタンプを送った。

仮病だったはずなのに、本当に熱が出て、うつらうつらしながら終日ベッドで過ごす。

祖母が何度か様子を見に来てくれて、おかゆを作ってくれた。

心配をかけて申し訳ないと思いつつ、その優しい味に、またほろりと涙がこぼれた。

翌朝はすっかり熱が引いて、しぶしぶ学校へ行く準備をする。

迎えに来なくていいと言ったのに、外に出ると一輝はいつものように車で迎えに来ていた。

「おはよう。もう大丈夫なのか？」

「おはよー。すっかり元気。ありがとう。じゃあ、私は駅に行くから」

彼の顔を見るとすっかり涙が出そうになるけど、それをぐっとこらえ平静を装って、陽葵は一輝に告げた。

一輝は切れ長の目で陽葵をじっと見て聞いてくる。

「なんでだ？ なにか気に障ることをしたか？」

「違うの。えっとね……、ベンツに乗るとアレルギーが出るようになったの。尋麻疹じんましんが出て、

もうかゆくなって」

理由を聞かれたらどう言おうかと昨夜考えた言い訳を明るく口にした。

「そうか。大変だな」

「そうなの。だから、私は電車で行くね」

一輝は不思議そうな顔をしたが自分のせいではないとわかったからか、深くつつこまず、すんなり引き下がってくれた。その様子に陽葵はほっとした。

しかし、翌日、家の前にはフェラーリが止まっていた。

「いやいや高級車がだめだから！」

「そうか。大衆車がいいか」

「そうじゃなくて……、く、車自体だめかも！ だから、これからずっと電車で行くから」  
陽葵が歩きだすとなぜか一輝まで並んで歩きだす。

彼から離れたいと思つての行動なのに、これでは意味がない。

「一輝は車で行けばいいじゃない」

「たまには電車で行くのも新鮮だ」

やんわりと断つたのに、一輝はそう言っついてくる。

結局、一緒に通学することになってしまった。

しかも、満員電車で密着して、いつもより距離が近い。

彼は腕で囲いを作り、陽葵をかばって踏ん張ってくれていた。他の乗客に押されているからか、

その頬を赤らめ、なにかに耐えるような顔をして、陽葵から目を逸らす。普段以上に寡黙だったのが、助かったような、気まづかったような、複雑な気分だった。

翌日、一輝は大衆車で迎えに来た。ピカピカの新車に見える。  
(まさかこのために買ったの!?)

大衆車にお仕着せの運転手がミスマッチで気の毒だった。

「だから、車がだめになったんだってば!」

「でも、あの満員電車はきついだろう? とりあえず、試しに乗ってみてくれ」  
そこまでされては断れず、陽葵はしぶしぶ車に乗り込んだ。

広い高級車と違い、大衆車は彼との距離が近い。

「わ、やっぱりムリ! 私、電車で行くから、一輝は車を使って」

陽葵は逃げ出した。なのに、彼は追いかけてくる。

「医者を呼ぶか……」

駅に向かいながら大真面目にそんなことをつぶやくから、観念して陽葵は直球で伝えた。

「あのね、もう送り返えがいららないの。今までありがとう」

「いらない……? これからずつとあんな満員電車に乗るのか?」

「あと半年だから大丈夫だよ」

「バイクならどうだ?」

「バイク乗れるの!?!」

「ああ、昨年免許取ってたまに乗ってる」

「ぜんぜん知らなかった。だけど、バイクもムリ」

彼の背中にしがみつく自分を想像してみた。

(ムリムリ。そんなことしたら心臓が壊れちゃう)

陽葵はブンブン首を横に振った。

翌日も送迎を断って、徹底的に一輝を避けた。

連絡も自分からはしない。

「最近、高遠さんと一緒にいないね」

クラスメイトが不思議そうに聞いてきた。そう言われるほどに、今まで二人は自然と一緒にいたのだ。

陽葵は敢えて明るく笑ってみせる。

「だって、ただの幼なじみだもん。今までが一緒にいすぎたのに気づいたんだ」

「あんなイケメン御曹司、捕まえとけばいいのに」

「そんなことできないよ。ちよつと最近、そばにいるのがつらくなってきて……」

「そうなんだ。まあわかる気がする。ハイスペックすぎるのも疲れるよね」

「まあ、ね」

本当はそんな理由ではなかった。けれど、みじめすぎて言えず、その言葉を流した。一輝の話をするだけで涙が浮かびそうになり、早く話を切り上げたたくもあつたのだ。

さんざん避けた結果、一輝からも連絡が間遠くなり、とうとう途絶えた。自分が意図したことなのに、連絡が来なくなるとさみしくて陽葵は泣いた。

それからは、実家から離れた大学に行き、一人暮らしを始めたので、このところは一輝を見かけることすらなかった。

だから、一輝に会うのは本当に久しぶりだった。成長した彼は高校のときからさらに背が伸び、凛々しさが増していた。昔は短めに切りそろえていた髪も少し長めで毛先を遊ばせていて洗練された色気がある。それだけでなく、なにごとにも動じないような大人の余裕が感じられた。

離れて久しいというのに陽葵の目は相変わらず彼に惹きつけられてしまう。切ない想いがよみがえり、胸が痛んだ。

なにか言いたそうにじつと見てくる彼に、無言で頭を下げ、陽葵はそそくさと家の中に入ってしまった。

今日は陽葵が来るからなのか、駄菓子屋は閉じていて、その横のドアから実家に入る。

「ただいま」

「おかえりなさい。忙しいのに悪かったね」

声をかけて靴を脱いでいると、落ち着かない様子の祖母に出迎えられた。なぜかその横には母方の叔母もいる。

こんな祖母の姿は初めてで、陽葵はますます心配になった。

玄関口ではあるが、尋ねずにはいられなかった。

「どうしたの？」

「それが……とりあえず、座ってから話すわ」

口ごもった祖母の顔色は悪い。

居間に行き、腰を落ち着けると、祖母が陽葵に麦茶を出してくれた。

まだ四月だというのに今日は初夏の暑さで、じんわりと汗をかいていた陽葵はさつそく喉を潤した。カランと氷が涼しげな音を立て、馴染みのある味が口の中を冷やしてくれる。

実家に帰ってきたなと感じて、ほっと一息ついた。

「それで、なにがあったの？」

陽葵は改めて祖母に目を向け、話を促す。しかし、よつぱど気まずいのかなかなか言い出さない。

「それが、ね……」

ちらりと陽葵を見た祖母はまたすぐ視線を落として黙り込む。

たまりかねた叔母が代わりに話し始めた。

「実はね、久志が借金を作って夜逃げしちゃったの。その連帯保証人にお母さんがなっていてね、返済を求められているのよ」

「叔父さんが!? 夜逃げって……。それで借金って、いくらなんですか？」

少しだった貯金があると考えて、恐る恐る聞いてみた陽葵の耳に、とんでもない金額が飛び込

んできた。

「一億よ」

「一億!? そんなお金あるはずが……」

その途方もない金額に愕然として、陽葵は顔色を失う。

しかし、叔母はなぜかになまりとして話を続けた。

「そうなのよね。でも、そのお金を貸してくれた会社の社長さんがいい話をくれたの」

「いい話、ですか?」

借金絡みにいい話などあるはずがないのにと思っ、不審の目を向けるが、叔母は本気でそう思っているようで、半ばうれしそうに陽葵に告げた。

「なんと、あなたが息子の嫁に来てくれるなら借金をチャラにしてもいいって言ってくれたのよ」

「私が嫁に? どうして?」

予想もしていなかったことを言われて、陽葵は目を丸くする。

自分が一億円と引き換えになるとは考えもしなかったし、そもそもどうして自分なのかかわからない。

その答えはあっさりと叔母から出てきた。

「どうやらあなたを見初めたそうよ。世田さんって知ってるでしょう? あなたの会社の取引相手だっけ話よ」

その名前を聞いて、陽葵は思わず顔をしかめた。

「もしかしてセタマートの世田さん?」

それは昨日も無茶なことを言ってきたクライアアントの担当者だ。陽葵の猫っぽいい美人顔がとても好みだとよく誘われていたが、まさか本気だとは思っていなかった。

たまにこういうしつこい相手はいるし、のらりくらりかわ躲していたが、お得意さんだから無下にもできなくて困っていたのだ。そういえば、セタマート社長の三男だということをちよくちよく匂わせていた。

(こんな手を使ってくるなんて……)

もともと信頼できない人だとは感じていたが、ますます評価が下がる。

そんな陽葵の心境を知らず、叔母は言い募る。

「そりゃあ、四十歳でちよつと歳上だけど、あなたももう二十七歳だし、そんなお金持ちのところ嫁げるなんてラッキーよ。それに、さんざんお母さんに迷惑かけてきたんだから、そろそろ恩返ししてもいいんじゃない?」

「私は迷惑かけられた覚えはないよ!」

祖母が声を荒らげて反論してくれるが、陽葵は叔母の言うことももつともだと感じた。

別にお金持ちに嫁ぎたいとは思わないが、苦勞して自分を育ててくれた祖母の役に立つなら、それもいいだろうと思っただのだ。

(どうせ結婚したい人なんていないし……)

そう思いつつも、先ほど会った幼なじみの顔がふいに思い浮かんで、未練がましい自分にあき

れる。

(好きな人と結婚しないのであれば、誰とだって一緒だわ)

陽葵が来る前から話し合っていたらしく、祖母はあきらかに反対だと分かる渋い顔をしており、賛成派の叔母ともめていたようだ。

祖母をチラチラと気にしながら、叔母が言った。

「とりあえず、お見合いしてみない？」

「……わかりました」

ほぼ覚悟を決めた陽葵が素直にうなずいたら、祖母が慌てたように止めてくる。

「陽葵、無理しなくていいんだよ？ いざとなればここを売ったら——」

「そんなのダメよ！ とりあえず、会ってみる。どうしてもダメだったらちゃんと断るから」

「本当かい？ すまないね、久志のせいで……」

急に老け込んで小さくなったような祖母を見て切なくなり、陽葵は明るくなだめるように言った。

「大丈夫よ、おばあちゃん。なんとかなるわ！」

「そうよ。これでうまく収まるわ、お母さん。それじゃあ、世田さんに伝えておくわね」

叔母は喜び勇んでお見合いをセッティングし、翌週の土曜日に行われることが早々と決まった。

(よりによって世田さんと結婚することになるなんて……)

陽葵は暗い気持ちになったが、祖母に恩返しをするためならと腹をくくった。

お見合いの日、陽葵は実家で叔母に無理やり振袖を着せられた。叔母は上機嫌でせっせと陽葵の用意を手伝ってくれる。よほどこの縁を結びたいらしい。

「綺麗ね。やっぱり陽葵はこの色が似合うわ」

陽葵を見て祖母が言う。エメラルドグリーンの地の華やかな振袖は母のもので、色白ではつきりした顔立ちの陽葵をより引き立たせていた。

帯留めは、一輝からもらったペリドットのブローチだ。

ペリドットの石言葉は『希望』。困難な状況でも希望を持ち続け、前向きに進む力を与えてくれると言われている。陽葵はそれをなでて、勇気をもらった。

祖母は彼女を褒めながらも、ずっと顔を曇らせている。だから陽葵は意識的に明るく言った。

「ありがとう。お母さんの振袖、素敵よね。こんな機会でもない到着ないからうれしい」

「それもそうね。懐かしいわ」

「本当に綺麗ね。これでお見合いもうまくいくはずよ」

陽葵の言葉にせっかく祖母が気を取り直して眉を開いたのに、叔母がよけいなことを言うから、また祖母の表情が翳かげってしまった。

(叔母さんったら、ちよつとは空気を読んでよ！)

叔母は悪い人ではないのだが、思い込みが激しくてマイペースなのだ。

「それじゃあ、行ってきます」

そう声をかけて一人で実家の玄関から出る。

略式にするため、会うのは本人たちだけなのだ。  
ドアを閉め、振り向くと、目の前に一輝がいた。

休日の昼間だというのに仕事なのか、濃紺の三つ揃えスーツを着ている。

「っ！」

スーツ姿の彼は有能そうで、洗練された美しさがあり、見惚れるぐらいかっこいい。

(なにもこんな日に会わなくていいのに)

家が隣同士なので会ってしまうのは仕方がないものの、嫌な予定がますます憂鬱になった。

一輝を見るだけで、まだ切なさに胸がじくじくと痛むのだ。

「ひ、久しぶり」

「どこに行くんだ？」

さすがに無視するわけにもいかず、陽葵は挨拶をしたが、それに応えることもなく一輝はいきなり聞いてきた。無愛想がデフォルトな彼だが、それにしてもずいぶんこわばった顔をしている。

見合いとは言いたくなくて、言葉を濁して返す。

「ちよつと大人の事情で食事会に」

「見合いなんだろ？ 母から聞いた」

「なんだ、知ってたなら聞かないでよ」

尋ねてきたわりに知っていたようで、一輝がそう言うから、陽葵はムツとした。

「あら、一輝くん」

二人がそんなやり取りをしていると、声が聞こえたのか祖母も出てきた。

「こんにちは。どうして陽葵はお見合いなんてすることになったのですか？」

「ちよつと、一輝！」

彼がいきなりデリケートなことを聞いてくるので、驚いた陽葵は慌ててたしなめようとする。  
案の定、祖母は暗い顔になってしまった。

「それは私が悪いのよ……」

「おばあちゃんは悪くないわ！」

「でも、あなたが犠牲になるのは——」

「どういうことですか？ なにがあつたのか教えてもらえませんか？」

祖母をなぐさめようとしていたのに、一輝が割り込んでくる。有無を言わさないとばかりの圧を感じた。祖母はそれに頼もしさを感じたのか、胸のつかえを吐き出すように事情を語ってしまう。

「借金の形に陽葵が結婚しないとイケないの……」

「え、借金の形ですか？」

「そうなのよ。息子の久志がね——」

陽葵が止める間もなく祖母は一部始終を語り始めた。

真摯な表情をした一輝は巧みな相槌で、状況をうまく聞き出していく。

「一億か……」

考え込むように顎に拳を当てた一輝はつぶやいた。

家庭の事情を赤裸々にされて恥ずかしくなった陽葵は話を打ち切るように言う。

「あつ、もう遅れそうだから、私、行くね!」

一輝が考えたつてどうしようもない問題なのだ。

気まずい雰囲気にしたたまれなくなつて陽葵は歩きだす。

「いつてらつしゃい。本当に無理しないで!」

「大丈夫よ」

祖母はそう言つてくれるが、陽葵は心に決めていた。

借金返済の代わりに結婚しよう。

それなのに、なぜか一輝も一緒についてくる。

「一輝も駅に行くの?」

車を使えばいいのにと思いながら聞くと、質問とは違う答えが返つてきた。

「一億なら、俺が払つてやる」

「はあ? なに言つてるの!? 私たちはただの幼なじみじゃない。そんなことをしてもらふ義理は

ないわ!」

カツとなつて陽葵は叫んだ。

また同情されていると思ひ、腹が立つて仕方なかつたのだ。

しかし、一輝は冷静な声で諭すように言つてくる。

「解消する手立てがあるというのに、幼なじみが嫌な男と結婚して生涯を棒に振るのを見ていたら

なご」

「嫌な男とは限らないじゃない」

「こんなことを言いだすやつは碌ろくな男じゃないし、君の態度を見ていたらわかる」

正論を吐かれてグツと詰まるも、陽葵は首を横に振る。

「それでも、幼なじみというだけで、そんなことをしてもらふわけにはいかないわ」

「じゃあ、家族になればいいか? 結婚してくれ」

「……っ」

突然のプロポーズに陽葵の息が止まった。

(一輝と結婚!?)

迷惑な男から好きでたまらなかつた男に相手が変わると思うと反射的に喜んでしまつたが、すぐにそうじゃないと思ひ直す。

幼なじみを救うために結婚するなんて発想はどう考えてもおかしい。

「ど、どうして? なに言つてるのよ!」

そこまで憐れまれているのかと思つたと反発心に火がついて、陽葵はつつかかるように言つてしまふ。

まっ。

しかし、一輝はそれを気にする様子もなく、さらりと答えた。一生のことだといふのに。

「……親が早く結婚しろとうるさいんだ。だから、ちょうどいい」

一応、彼なりの理由があるようで、陽葵は昂つた感情を落ち着けたが、それでも完全に納得はで

きなくて疑わしそうに尋ねる。

「そうだとしても、一輝なら引く手あまたでしょ？」

「だけど、誰にも心が動かないんだ。それだったら洗人ひろとたちとつるんでるほうがよっぽどいい」

「誰にも？ 女性に興味ないってこと？」

「ああ。親しくなりたいと思う相手はいなかった。陽葵だけなんだ。一緒にいて楽しいと思えるのは」

思いがけない回答に、陽葵は目を瞬いた。

唯一と言われるのはうれしいが、それ以上にある疑いが浮かんだからだ。

昔から一輝のそばにいるのは男性だけだったことを思い出す。特に名前の出た洗人は山科やましな洗人という高校時代からの彼の親友で、いつも一緒にいるから妙な噂を立てられるほどだった。

——高遠くと山科くんってセットで目の保養よね。

——本当。萌えるわ。

——萌える？ ちよつとなに妄想してるのよ！

——だって、山科くんはともかく高遠くんってほとんど女子としゃべらないでしょ？ あんなにモテるのに彼女を作らないし。あやしいと思つて。

——キヤー。でも、あの二人なら許せる〜！

当時は同級生を中心にひそかにそんなことをささやかれていた。

（あの噂って本当のことだったの？ もしかして一輝って男性しか愛せない人だったりする？）

噂を笑い話としか思つていなかったが、それが真実だとしたら辻褄が合う。

どうりで陽葵以外の女の子には冷たかったはずだ。そして、こんな優良物件なのに、独身というのもそのせいかと納得した。

彼の両親は彼に女つ気がないのを心配して、結婚を急かしているのかもしれない。

それでも、陽葵にはまだためらいがあった。

どう考えても一輝が一億円を出す理由はないと思つたのだ。

同意しない陽葵を見て、一輝が焦れたように言う。

「君に俺の子どもを産んでほしい」

切羽詰まった声に驚いて、彼を見上げると、やけに熱い瞳とぶつかった。

「子ども？」

それを聞いて、一輝の意図がわかった。

いくら好きでも男性同士では子どもは作れない。つまり、タカトーを継ぐ者がいなくなってしまうのだ。

（だから、一億出すから私に子どもを産んでくれと言っているのね）

一輝のほうも親を安心させるための結婚というだけでなく、切実な理由があつてのプロポーズなのだ。腑に落ちた。

「つまり、子どもを産む代わりに、一億くれる契約結婚ってこと？」

「……そう考えてくれてもいい」

陽葵が聞くと、正解だったようで一輝はあっさりとうなずく。

自分で言っただけに肯定されると陽葵は落胆した。

心のどこかで、好きだからという理由を待ち望んでいたのだ。

(そんなわけないのね……。私はただ幼なじみだから気安いだけ)

昔は一輝と仲が良かったけれど、二人きりになってもまったく色っぽい雰囲気にはならなかった。それがすべての答えだったのだ。

自分が恋愛対象ではないと改めて思い知らされてがっかりしながらも、陽葵は彼を見つめて考えた。

しつこい世田には嫌悪感しか覚えない。それなら、愛されないとしても一輝との契約結婚のほうがいいに決まっている。

ためらいつつ、陽葵は口を開いて問いかけた。

「……本当に私でいいの？ 一輝の子どもを産みたいっていう相手なんていくらでもいると思うけど」

「陽葵がいいんだ」

なぜか一輝が前のめりに断言するから、ドキッとする。

(ちよっと言葉の選び方を考えてよ！ 勘違いしちゃうじゃない)

彼にそんなつもりはないのはわかっているのに、陽葵の心臓が早鐘を打つ。

一輝も誤解を招く発言だったと思ったのか、言葉を足してきた。

「君は昔から俺に対してフラットに接してくれた。家柄にとらわれなくて、ちゃんと俺を見てくれた。そんな人はめったにいない。君と洗人ぐらいだ。だから、君がいいんだ」

一輝がそんなことを思っていたとは知らず、驚いた。

陽葵だって、一輝の家の金持ちっぷりには引くところはあったが、昔から知っているから慣れていたし、色眼鏡で見ることがはしたくなくて気をつけてもいた。

だからこそ、彼は陽葵を受け入れていたのだろう。

(そういうことだったんだ。本命は山科くんで、私は幼なじみで慣れているからちよっどいいというわけね)

幼なじみで気心知れた相手なら、一緒にいても許容できると考えたのかもしれない。

考えてみたら、高校のとき、一輝が陽葵との仲を否定していたときにも山科がいた。

好きな人に誤解されなくなかったのかもしれない。

陽葵の中で点と点が繋がった。

「わかったわ」

「本当か？ 結婚してくれるのか？」

困っているのは陽葵のほうなのに、一輝は勢い込んで確認してくる。

その熱心に、彼のほうも悩んでいたのだとわかって、メリットがあるのは自分だけではないと安堵した。一方的な関係は嫌だったから。

「こちらこそ、お願いします」

「ああ、よろしく」

改まった口調で陽葵が言うと、一輝が爽快に笑った。よほどほっとしたのだろう。仲がよかったときにもめったに見られなかったその会心の笑みに心を掴まれ、陽葵は胸を押さえる。

（あれ？ 私、大丈夫かな？）

こんなことで動揺していて、彼との生活がうまくできるのかと少々不安になったが、そのうち慣れるだろうと軽く考えて流した。一輝と結婚できるといふ高揚感で夢見心地だったのだ。

二人で話している間に駅に着く。

「じゃあ、私、お見合いに行ってくるね」

「なんでだ？」

「だって、ドタキャンするわけにはいかないでしょう？ ちゃんと行って断らなきゃ」

一輝との契約結婚を承諾したものの、今からお見合いをキャンセルすることはできない。誠意を持って謝ろうと考えたのだ。

「そういうことなら俺も行く」

焦った表情を浮かべた一輝はほっと息を吐いて、そんなことを言いだした。

子どものころから冷静沈着だった彼にしてはやけに感情を露わにしている。彼も人生の中の大事な決断をして感傷的になつていったのかもしれない。

彼の態度を少し不思議に思いながら、陽葵は首を振って断った。

「いいよ。自分のことだもん。自分で始末をつけるわ」

「そういうわけにはいかない。結婚するのだから、俺のことでもある」  
きっぱりと言われて、陽葵の顔が赤らむ。

急に彼との結婚が現実味を帯びて感じられたからだ。

それに一輝が真剣に自分のことを考えてくれているのがうれしかった。

（一輝のこういう真面目なところ、本当に好き）

結局、陽葵の気持ちは高校時代からまったく変わっていないかったのだ。

「ありがとう」

勝気なわりに断ることは苦手だから、彼がついてきてくれるのは心強い。

ほっと肩の力が抜けた。

世田と結婚しないといけないと思いつめていたのが一転、陽葵にとって最高の状況になった。

「それなら車で行こう」

一輝は手を上げ、タクシーを捕まえる。

「着物だから、俺が先に乗ったほうがいいよな？」

「うん。っていうか電車でよかったのに」

「まだ車は苦手か？」

「そういうわけじゃないけど……」

高校時代の嘘を蒸し返されて、陽葵は気まずくて口ごもる。

考えたら、当時は自分の想いばかり優先して動いていたが、一輝にとって陽葵はいきなり距離を

置き始めた幼なじみだ。

それに対して、彼は怒っていないのだろうかと今さらながら思う。ちらりと顔色を窺うも、いつもの無愛想な表情に戻った一輝の考えは読めなかった。しばらくして、タクシーが見合いの場となるホテルに着いた。

世田から指定されたのはその中の和食レストランの個室だった。

そこまで来て、『付き添いなしで』と言われていたのを思い出す。

案内された部屋の前で陽葵は一輝に言った。

「ごめん、ちょっとロビーで待ってて」

「なぜだ？」

「一人で来いって言われてたのを忘れてたのよ」

ただでさえ断るのに、事前に出されていた指示を破るのは気が引けたのだ。

一輝は眉を寄せ、不服そうだったが、しぶしぶというようにうなずいた。

引き戸を開けると、上座であぐらをかいていた世田が立ち上がった。

部屋に入った陽葵は戸を閉めたが、一歩中に入っただけで、そこに留まった。

「ようこそ、西方さん。いや、もう陽葵と呼んでもいいかな？」

彼はニヤニヤと笑い、無遠慮にそう言う。いかにも自分が有利な立場だと確信している様子で、

陽葵は嫌悪感を覚えた。

(いきなり呼び捨てって凶々しいと思いますが?)

そう思ったものの、声には出さずに、頭を下げる。

「世田さん、申し訳ありません。せっかくのお話ですが、なかったことにさせてもらいたいです」

「なんだと!？」

まさか断られるとは思っていなかったようで、世田は瞬時に顔を醜く歪めた。そればかりか、大股で近づいてきて、陽葵の手を掴む。

「どういうことだ!？」

その剣幕に陽葵はビクッと肩を震わせた。

それでも、彼の手を振り払い、事務的な態度で淡々と言う。

「一億円はお返ししますので、あなたとは結婚しません」

すると、そのとたん、無言で突き飛ばされた。

「きゃっ!」

なにをされたのかわからないまま畳の上に転がった陽葵に、世田がのしかかってくる。

両手首を掴まれて、着物の裾が乱れたのも直せない。

「ふざけるな! 一億だぞ? 返せるわけないだろ!」

「返せますから、放してください!」

「よけいな抵抗してないで、俺の女になればいいんだ!」

「嫌です!」

目をギラギラさせた世田が恐ろしくて、逃れようともがくが、彼はびくともしない。  
そこへ――

「なにをしてる!」

鋭い声が響き、ふっと陽葵の身体の上から重みが消えた。

一輝が世田を投げ飛ばしたのだ。

そして、彼は陽葵を抱き起こして裾を直してくれる。

(一輝……)

安堵に瞳が潤んだが、それをぐっと堪えて、陽葵は世田をにらんだ。

世田のほうも尻もちをついた状態で、一輝と陽葵を交互ににらみつけている。

「誰だ、お前は?」

凶悪な声で、世田がすくむ。

陽葵を背中にかばいながら、一輝が鋭いまなざしを向け答えた。

「陽葵の婚約者だ」

「婚約者!? どういうことだ?」

真っ赤な顔をして口もとを震わせた世田はわめく。その姿は自分の欲が満たせないと暴れるがままな子どものようだ。

「俺は高遠一輝だ。一億円は口座を言ってもらえれば、即座に払うから、二度と陽葵には手出ししないでくれ」

そう宣言して、一輝は名刺を座卓の上に置いた。

それを確認した世田は驚いたように目を剥く。

「タカトの副社長だと?」

格が違う相手だと気づいた彼は悔しそうに唇を噛んだ。

セタマートは地域密着といえれば聞こえはいいが、都内十店舗規模の会社だ。それに対して、タカト一は家電を全世界に流通させているグローバル企業なのだ。

無言で立ち上がった世田は、座卓の上の鍵を掴んで、荒々しく立ち去った。彼が持っていたのは明らかにこのホテルのルームキーだった。

それを見た陽葵は身を震わせる。

もしかしたら、世田はこの部屋を取っていて、自分をさっそく奪おうとしていたのかもしれないと思っただのだ。

「大丈夫か?」

蒼白になった彼女の頬を温めるように一輝は手を添え、気遣ってくれた。

彼がいてくれて本当によかったと陽葵は胸をなでおろす。

一輝の申し出がなければ、どんなに嫌でも世田にされるがままだったに違いない。

覚悟したつもりだったが、実際に本人を目の前にしたら拒否感がすさまじく、甘く考えていたことを痛感した。そもそも彼とは生理的に合わないから、ずっと誘いを断っていたのだ。その直感は正しかったとつくづく思った。

「……ありがとう、大丈夫よ」

震えそうになる声を抑えて、陽葵は一輝を見上げる。その瞬間、抱きしめられた。

温かい腕の中、硬い胸板に顔が押しつけられて、やけに速い彼の鼓動を感じる。そこは安心できる場所で、守られていると思えた。

涙が出そうになるのを目をぎゅゅとつぶって堪えて、代わりに彼のジャケットの端を握る。

一輝は陽葵がふっと肩の力を抜くまでそのまま、背中をなでてくれていた。

「ありがとう。もう大丈夫」

先ほどと同じような言葉が出たけれど、今度は虚勢ではなく本当に落ち着いていた。

一輝が腕を解くと、あまりに近いところに顔があつて、二人は顔を赤らめる。

「悪い……」

顔を背けた一輝は立ち上がり、陽葵に手を差し出した。

その手に掴まって立つと、「帰ろう」と言った一輝にそのまま手を引かれていく。

レストランを出るとき、支払いをさらりと済ませた一輝のとてもスマートな対応に陽葵は感心した。

タクシーで実家に戻ったら、そのまま一輝がついてくる。

不思議そうな顔をした陽葵の反応が不服だったようで、彼は無愛想に言った。

「結婚するって報告しないといけないだろ？」

「あつ、そっか。一緒に来てくれるの？」

たしかに、ことの顛末を話すのに一輝がいたほうがいい。でも、これ以上面倒をかけるのも申し訳ないという気持ちもあった。

しかし、一輝はきっぱりと言ってくれた。

「当たり前だろう。俺たち二人のことなんだから」

（二人のこと……）

彼の言葉がうれしくて、陽葵は頬をゆるめる。

「そうだね。よろしくね」

彼らが連れ立って家の中に入ると、あまりに早い帰宅に祖母も叔母も驚いていた。

「ずいぶん早かったのね。それに一輝くんはどうして？」

祖母に聞かれて、陽葵は照れくさそうに一輝を見上げてから答えた。

「いろいろあつて、一輝と結婚することにしたの」

「ええっ!？」

その言葉に祖母も叔母も驚愕の声を漏らした。

とりあえず居間へ上がって、陽葵と一輝は並んで座る。

向かいに座った祖母と叔母を見て、真摯な姿勢で一輝が頭を下げた。

「陽葵さんと結婚させてください」

いきなりのことに戸惑ったままの祖母は一輝を見たり陽葵を見たりして視線をさまよわせた。そ

して、最後に相談するように叔母に視線を合わせる。

叔母はどうしたらいいかわからないとばかりに肩をすくめた。

しかたないというように叔母は一輝を見て答える。

「ありがたいお話だけど、なにがどうなってるのか……」

(そりゃそうよね)

陽葵が苦笑して、口を挟んだ。そして、簡単に説明する。

「あのね。借金のことを話したでしょう？ そうしたら一輝がプロポーズしてくれたの」

「どういうこと？」

借金とプロポーズの繋がりがわからず、叔母は聞いてくる。

すると、今度は一輝が説明を引き受けた。

「ずっと好きだった陽葵をほかの男に取られるのは嫌だったので、借金は俺が払うから、結婚してくれと言ったんです」

「ちよつと、一輝！」

「まあ！」

タクシーの中で打ち合わせて、よけいな心配をかけるので、契約結婚だということは黙っておくと口裏を合わせていた。しかし、彼がそんな嘘をつくとは思わなくて、陽葵は焦って声をあげた。「それらしいだろ？」と一輝がささやくから、そういうことかと悟り、動揺して損した気持ちになる。しかし、叔母がそれを聞いて、ぱつと顔を明るくしたので、否定もできない。

叔母も納得してうなずき、頬をゆるめて陽葵を見る。

「そうだったのね。陽葵ちゃん、やるわね。歳の離れたおじさんより一輝くんの方がよっぽどいいじゃないの！」

調子のいい叔母は世田を薦めていたくせにあつさり手のひらを返してそう言うから、陽葵はあきれた。

いろいろ思うところはあがるが、陽葵は状況に乗っかって言った。

「一輝がそう言ってくれるから、それに甘えようと思って。……私も同じ気持ちだったし」

最後にこそつと自分の気持ちも付け加えてみたら、一輝が驚いたように見てきたので、「もっともらしいでしょ？」とやり返すように彼にささやいた。

「なるほど」と一輝は苦笑したあと、もう一度叔母を見て告げる。

「そういうわけで、陽葵と結婚したいんです」

今度は叔母も笑顔でうなずいて答えた。

「一輝くん、ありがとう。あなたなら安心して陽葵を任せられるわ。本当にありがとう。お金は少しづつでも必ず返すから」

もともと陽葵を世田とお見合いさせるのさえためらっていた叔母は、結婚相手が一輝になってよかったと喜び、彼の手を取って、何度も礼を言う。

「いいえ、俺のほうこそ、陽葵と結婚できてうれしんです。お金のことは気にしないでください。家族になるのですから」

## 立ち読みサンプル はここまで

一輝が言葉通り本当に幸せそうに微笑むから、陽葵の心臓がトクトクと騒ぎ出した。  
（おばあちゃん達を心配させないための演技だわ）

そう思うものの、少しでも真意が混じっていたらいいなとつい願ってしまう。

「それじゃあ、今晚はお祝いにしない？」

弾んだ声で祖母が言うので、だましているようで陽葵の胸が痛んだ。

陽葵が答える前に、一輝がやんわりと言った。

「お誘いは嬉しいのですが、このあとうちにも報告に行きたくて。日を改めてお呼ばれしていいですか？」

（そっか、一輝のところにも挨拶に行かないとね）

結婚ともなると自分たちだけのことではないと今さらながら気づく。

急に不安になってきて考えた。

（高遠のおじさまもおばさまも本当に一輝の相手が私でいいのかしら？）

陽葵が悩んでいる間にも、祖母と一輝の会話は進んでいく。

「もちろんよ。ご両親によろしくね。あ、私もご挨拶に伺ったほうがいいかしら？」

「それなら、正式に顔合わせの場を設けましょう。来週の土曜日はいかがですか？」

祖母が浮ついた様子で先走ったことを言うと、それを受けて一輝が如才なく段取りしていく。

「私のほうはいつでもいいけど、陽葵の予定は？」

「えっ、私？ 大丈夫だけど……」

「じゃあ、どこか店を探して予約しておきます。決まったらご連絡しますね」

どんどんと予定が決まっていくのを、陽葵は現実感なく見ていることしかできなかった。

それから振袖姿の陽葵は、一輝に連れられて隣の高遠家に向かった。

着替えてから行くかと一輝に聞かれたが、結婚の挨拶ならちゃんとした格好のほうがいいだろう  
と思い、そのまま行くことにしたのだ。

まさかお見合いの格好がこんなふうな役立つとは思わなかったと陽葵は苦笑した。

自分の家から高遠家の門前に行くのと、門から広い庭を通って玄関まで行く距離は変わらなくて、  
相変わらず広いなと思いつながら歩いていく。

白い立方体を重ねたような洒落た建物が高遠邸だ。

鍵は生体認証キーにしたらしく、一輝がドアのハンドルを押しただけで開いた。

玄関の床に敷いてある大理石に、幼いころ一輝と見つけたアンモナイトの化石を発見して、懐か  
しい気分になる。

（昔はしょっちゅうお邪魔していたのに、ずいぶん、ここにも来ていないわ）

そこへ一輝の母親が通りかかり、陽葵を見て笑顔を浮かべた。

「ご無沙汰しております」

「あら、陽葵ちゃん、いらっしやい。本当に久しぶりね。綺麗な格好をしてどうしたの？ そうい  
えば、お見合いって今日だったかしら？」